

## 第10回日本語教育国際 研究大会に参加して

北陸大学国際交流センター准教授  
横田隆志

2011年8月19日から21日の間、中国天津市にある天津学国語大学で「異文化間コミュニケーションのための日本語教育」をテーマに第10回日本語教育国際研究大会が開催された。この世界日本語教育国際研究大会は、8つの国・地域の学協会が「日本語教育グローバルネットワーク」を設けて、研究・教育の交流と促進を目標に1998年から開催している国際的な日本語教育についての研究大会である。これまで日本、韓国、中国、米国で開催し、今年で10回目となった。本大会は世界26カ国と地域から過去最多の2000人を超える研究者、教育者が参加し、特別講演、記念講演、基調講演、パネルディスカッション、ワークショップ、リレー講演、分科会、ポスター発表などが行われた。



8月20日は、開会式に引き続き、中川正春氏（日本国衆議院議員）による「新しい国の形と日本語戦略」、平田オリザ氏（劇作家・大阪大学教授）による「変わりゆく日本語、変わらない日本語」、水谷修氏（名古屋外国語大学学長）による「専門領域と日本語教育を結びつける苦しさ」、修剛氏（天津外国語大学学長）による「異文化間コミュニケーションと日本語教育」というタイトルで特別講演が行われた。中川正春氏は日本語教育を充実させるために必要な教育システムの構築について海外レベル、国レベ

ル、また地方自治体レベルでどのようにするべきかについての提案をした。海外での日本の情報発信をどのようにしていくか、そして、さまざまな日本語学習者が存在する現在、国内で移民をどのように受け入れていくかが今後の大きな課題だと思った。平田オリザ氏は日本語の話し言葉の変化の一断面を考察し、その日本語の変化が日本語教育に与える変化について述べた。劇作家としての立場から、これからの日本語教育に必要なことは話し言葉の新しいカテゴリーの「対話」という概念を確立し、「対話」の冗長率を操作する能力を学習者に身につけさせることだと提案していた。これまでの日本語教育では冗長率を低くしていく教育を重視していたため、非常に新しい視点からの日本語教育への提案だったように感じた。水谷修氏は過去の5つの職場での日本語教育の体験から日本語教育を言語そのものの教育から文化・社会をとり込む教育に展開していく必要があると述べていた。そのためには他領域の人々との

協力ではなく、日本語教育の専門家が他領域に食い込んでいく必要があることを強調していた。この講演からこれまでの日本語教育における研究について見直し、更に新しい挑戦が必要であることを実感させられた。最後の修剛氏は今回の研究大会のテーマである「異文化間コミュニケーションと日本語教育」という視点から中国の大学における日本語教育の現状について中国語と日本語の違いにも触れながら、ユーモアに富んだ講演をしてくれた。言語学習の目的は文化が異なる人々とのコミュニケーションなので、日本語教師は日本語を教えるだけでなく、言語教育を通じて異文化理解を深めるための役割を果たさなくてはならないことを再認識させられた。

午後は日本語教育グローバルネットワーク代表者によるパネルディスカッション、リレー講演、4種類の基調講演、6会場でのワークショップが行われ、その後、「異文化コミュニケーション」、「日本語研究と日本語教育」、「日本文学研究と日本語教育」、「ビジネス日本語の日本語教育」、「日本語教育」の5つのカテゴリーの分科会Ⅰが行われた。国際大会ならではの「日本語教育のアーティキュレーション確立」についてのパネルディスカッションでは、各国、各地域で行っている中等教育、高等教育の縦の活動だけではなく、更に国、地域を越えた世界レベルでのアーティキュレーションの確立について話し合いが行われた。アメリカ、イギリス、カナダ、韓国、香港、日本の代表者が活動状況の報告をし、このプログラムが果たす役割、影響について議論を行っていた。日本語教育は日本だけのものではなく、世界規模で進化しており、日本語教育がその普及から質の向上へと焦点が変化していることを感じた。リレー講演では「異なる文化によって日本事情はどのようにとらえられているのか」というサブタイトルで「多文化共生能力を育成する日本事情教科書の開発」について各国、地域の講演者がリレー形式で講演を行い、その後、会場参加者との意見交換を通じて新しい日本事情教育の連携と教科書のあり方について再考していた。日本事情教育が「知識」の日本事情教育から「考える」日本事情教育に変化する中、世界を視野においた多文化理解、共生能力を育成するような日本事情教育が今後、必要になっていくのではないだろうか。

第2日目も朝8時から4つの基調講演、パネルディスカッション、ワークショップ、分科会Ⅱ、分科会Ⅲが行われた。筆者は8月21日の午前の分科会Ⅱ（日本語教育・教材開発）で座長を務めた。本分科会では「日本語教育」のグループの「教材開発と日本語教育」のセッションで、日本語教育の学術的な研究成果と実践的な教授活動から生み出された理論・技術を基盤とした多様な学習者やニーズに応じた教育内容・方法の改善及び教材について6つの研究発表が行われた。映像を使用した教材、e-learningなど教材もマルチメディア教材に進化していることが感じられた。また、筆者の日本語教育についてのビリーフスとして日本語の授業を行うために既存の教科書でいかに上手に教えるかということより、自分なりの教え方を常に模索したいというがあるので、今回の分科会ではさまざまな教材についての考え方に触れることができ、今後の教材開発についてよい刺激を受けた。

本大会に参加し、世界の日本語教育に関する最新の情報、最先端の研究成果に触れることができた。そして、国際的な視点から今後の日本語教育について各国、地域がどのように連携していくか、どのように強化していくかということについて考えさせられた。本大会は、学術的にも素晴らしい大会だったが、晩餐会、音楽の夕べ、お茶会など参加者が楽しめる工夫が至る所に見られた大会だった。これは中国で行う学会だからこそできたのではないかと思う。この大会の準備のために関わった大会実行メンバー、ボランティアの学生に感謝したい。